

## ハルディさん講演 特別セミナー「ボルネオの森林破壊とオランウータン」の報告

以下は4月16日に大阪のドーンセンターで行われたハルディさんの講演（JATAN 熱帯林行動ネットワーク主催で、ウータン・森と生活を考える会は共催）の記録です。できるだけ通訳した近藤さんの言葉に忠実に記録したつもりですが、聞き間違いなど不正確なところがあるかもしれません。講演でハルディさんは、写真やビデオを使っていますが、スペースの関係で一部しか載せられませんでした。写真やビデオの内容を想像しながら読んでいただくと助かります。一部ですが、分かりにくかったところは、削除したり、書き直しているところもありますが、元の意味は変えないようにしたつもりです。この講演のあと、参加者から、たくさんの質問が出され、ハルディさんに答えていただきましたが、ここでは割愛いたします。（米澤）



私は Centre for Orangutan Protection（オランウータン保護センター）という団体から来ましたハルディと申します。写真で私が抱えているオランウータンの名前はヘルクレス、彼は私たちのセンターの中で、実は一番の劣等生です。オランウータンも人間と同じようなものですので、とっても賢い子もいれば、まあちょっと成績まいちの子がいて、いろいろあります。オランウータンはDNAが人間と97.3%同じなので、人間に近い知能を持っており、また、楽しい・悲しい・怖いというような感情を抱きます。人間のしぐさの真似もとてもよくしますので、たとえば檻の中に入っても鍵をあけようとして、人間の服を盗んだり、なかにはブラジャーをつけようとしたような子もいます。

これはインドネシアの地図です。オレンジで示されているのは火災が起きた場所です。こうした火災の大きな要因となっているのが森林開発です。COP（オランウータン保護センター）は2007年に私が友達と一緒に設立した団体です。COPの目的は、オランウータンが直面する犯罪とじかに闘い、オランウータン等が棲む生態系を守ることです。COPは主に3つのチームからなっておりまして、「エイプ・ディフェンダー」がオランウータンの救助・リハビリをするチーム。「エイプ・クルセーダー」というのはオランウータンがレスキューされる要因になっている農園開発地の調査と開発している企業に対するキャンペーンを行うチーム。「エイプ・ウォーリアー」というのはオランウータンだけにかぎらず、野生生物の違法取引の調査および告発を行っているチームです。

これはパーム油の原料になっているアブラヤシの苗木の写真です。こちらがその苗木が少し育って農園になっている状態で、手前がアブラヤシの農園ですが、奥をよく見ていただくと、まだ森が残っているのが見えると思います。そこが森と農園の境界線になります。そして右上がアブラヤシの木で、右下がアブラヤシの実ですね。それが油になって左のようないろいろな日用品の中に使われています。こちらは外国の製品ですけれども、私たちみんなが使う日用品であり、「使ったことがない」と言える人はいないだろうことを分かっていただけだと思います。あとは、燃料としても使われています。こういった需要が、森に起きている惨事のはじまりと言えると思います。アブラヤシを生産するための農園をつくるためには、だいたい企業は森を切り拓いて農園をつくります。実はインドネシアには、いくつか劣化した土地というものもあるのですが、そういった土地を農園開発するというよりは、多くの企業が森をわざわざ切り拓いて農園にするというを選びます。その理由としては、切り倒した木を木材として売ることによって利益が増えるということがあります。価値ある大きい木材は切り倒したあとには森をなくしてしまわないと農園にできないので、最後には火をつけて、森を燃やしてから農園開発をする企業が多いです。これは火災のあとの写真になりますが、こういった火災で生き残れる森の生物といたら、鳥ぐらいでしょう。森から飛んで逃げることができる鳥以外は、生き残れない。オランウータンもしっかりできて、たとえ火災から逃げさせたとしても、森＝家をなくし、食料もなくなったオランウータンは、ホームレス状態になります。火災を生き延びたオランウータンというのは、そのあとにできたアブラヤシ農園で食料を探すことになります。他に食べものがないので、植わっているアブラヤシの若い芽を食べて農園側からは害獣と見なされます。農園労働者につかまえられたオランウータンの多くは殺

されます。火災を生き延びたオランウータンは、あとは農園労働者に殺されるのを待つだけの人生を送るというケースがほとんどです。たとえ殺されることを免れたとしても、食べ物がなく餓死してしまいます。労働者に捕まえられたオランウータンというのはほぼ確実に、頭か手に深い傷を負っています。この画像のオランウータンの目のあたりを見ていただくと、少し腫れているのが分かるかと思うのですが、これはたぶんなぐられた痕です。先程の（ビデオでのオランウータン）の声というのは、とてもこわがっていて、「やめてくれ」と言っている、あるいは「どっか行ってくれ」と言っています。そして、このように最後には鉋でなぐられてなくなります。なぜこのように暴力行使に出るかという、オランウータンは人間の6倍ぐらいの力があるので、素手で立ち向かうと怖い。それで彼らは道具を使ってオランウータンにこのように傷を負わせるのです。なぐって気絶させ、手を縛って捕まえます。あるいはこのように指を切ってしまうケースがあって、いくつか理由があるのですが、一つとしては若いアブラヤシの芽をとった罰として切ると言うこともあります。あとは、例えばこの写真のオランウータンの赤ちゃんに関しては、赤ちゃんが母親にだきついて手を首の後ろまで回している状態の時に、プランテーションの労働者が母親を襲って、その時に母親の頭部を襲うことによって一緒に赤ちゃんの指に当てて切ってしまうということがあります。2000年以降カリマンタンでは、2800頭のオランウータンが救出されているというデータがありますが、その裏には2倍から10倍の数のオランウータンが、誰にも知られることなく殺されたり、餓死したりしていると考えられます。先程のオランウータンと違って、今のビデオのオランウータンは一見外傷がないように見えます。なので、他のオランウータンと比べてまだラッキーなのかなというふうに見えるのですが、他のキズが実はあります。特に女性の方はもしかしたらより共感されるかもしれませんが、表情を見ると失望して悲しそうな顔をしているのが分かると思います。このオランウータンの胸に注目すると乳首がたっている＝授乳の準備ができている状態なのが分かります。赤ちゃんがいるはずなのにいないということは、赤ちゃんを引き離されて、とても失望しているということです。外傷は見当たらないかも知れませんが、とても大きな心の傷を抱えています。外傷がなさそうに見えると言ったのですが、実はよくよく検査してみるとエアガンの銃弾が体の中からたくさん見つかりました。



私が COP を立ち上げた理由は、先程紹介したようなオランウータンを見てきて、そのオランウータンたちは真のアクションを求めており、そのために行動するためです。また、オランウータンを守る活動というのは、ひいては森を守る活動にもつながるのですが、その入り口としてとても人を誘致しやすい活動であるとも感じています。私たちの活動にはオランウータン保護以外にも様々なものがあり、開発企業、森林伐採に対するキャンペーンやアドボカシーもしています。それには、森林伐採の現場に行って証拠を集め、その調査結果を発表することで政策提言を行ったりしています。ウータン・森と生活を考える会とも協力しており、西岡さんと一緒に調査をしたこともあります。調査では必ず現場に出向き、写真を撮るなどの現場チェックをしています。写真のような白骨を証拠として見つけたこともあります。このような証拠をもってして警察に訴えかけ、厳しい法的処置を求めています。私たちは違法な開発行為に対しての調査をしているのですが、そのために企業から嫌がらせをされることもあります。インドネシアでは、きちんとした法的処置を求めることは難しいので、キャンペーンに市民を巻き込み、市民からのプレッシャーをかけるという工夫をしています。多くの人の注目を集めるために、私たちはとてもクリエイティブなやり方でキャンペーンを行っています。先程の調査やキャンペーンといった活動以外にも、森林伐採地でオランウータンを実際に救助・保護し、森が残っているところに移送するという活動も行っています。そしてまた、オランウータン保護センター（リハビリを行う施設）も建設しました。



写真のような、労働者につかまえられ飼われているオランウータンたちをレスキューして、私たちのセンターでリハビリを行うこと

によって、第2の人生を送れるようにしています。オランウータンのリハビリには、とても長い時間がかかり、時にはとても難しいですし、多額の資金を要します。色々と問題はありますが、その1つとして、人間に飼われていたオランウータンは肝炎や結核などの人間の病気がうつってしまい、深刻な病状にいたっていることがあります。あるいは、檻に閉じ込められて生活していたオランウータンなどは、トラウマを抱えていて回復プログラムを受ける必要があります。

この写真は私たちがリハビリテーションセンターを建てた土地で、インドネシア環境林業省の演習林を無償で譲り受けたものです。ここでは、オランウータンの保護・リハビリ以外に、植樹活動も必要とされているところです。私たちの活動は本当に多岐にわたっていて、オランウータン保護以外にもこのような森林の再生にも今後どんどん取り組んでいく必要がありますので、皆さんに色々な形でご支援いただけたらありがたいです。COPはとても小さな団体で資金もとても少ないです。先程のオランウータン保護センターも、建設業者なしに私たちスタッフとボランティアだけで建設を行いました。COPのオランウータン保護センターは、今インドネシアで5番目のオランウータン保護センターです。ここには19頭のオランウータンがいて、彼らの新しい生活の場となっています。このうち4頭は野生復帰できない事情を抱えていますが、15頭は野生復帰するために毎日トレーニングのために森の中に行っています。この写真はアニマル・キーパーと呼ばれるオランウータン・トレーニングの専門家として研修された地元の人で、彼らと一緒に森に入って、食料を探したり、巣を作ったりという森で生きる術を覚えるトレーニングを受け、夜にはまたセンターに戻ってくるという生活を過ごします。このアニマル・キーパーという職業が「ある」ということについては、地元の人々の雇用を生み出すという側面と、このような研修を通じて野生動物の狩猟を減らすという2つのメリットがあります。その他にも色々な分野で地元の人への研修を行っていて、英語やパソコン、インターネットの使い方に関する研修もしています。このような交流が功をなして、最近ではオランウータン保護に対して地元からの支援を受けることができました。この写真は、オランウータンのための「島」と呼んでいる、川の中州です。この土地は、オランウータンの野生復帰の場所として活用するために、地元の人から購入したものです。リリース予定の15頭のオランウータンは、この「島」あるいは中州に野生復帰することになっています。ケージに入れられる生活から、最終的には野生に戻って人間とのコンタクトを絶って生活することになります。この野生復帰は、来月から少しずつ段階を経て進めていく予定です。このような活動ためにとても重要なのは、いいチームワークです。COPはスタッフとして教育する以前からCOPスクール(コップ・スクール)というプログラムをしまして、この研修を受けた人たちが、スタッフになるということでもとてもいいチームワークを発揮しています。このCOPスクールにはインドネシア全国から参加者がいて、海外では今のところアメリカ、イギリス、オーストラリアと韓国からの参加者を受け入れたことがあります。近い将来には日本からの参加者がいることを願っています。来月に研修が迫っているので、もし、希望の方がいらしたら、すぐにお知らせ下さい。



これはCOPスクールの空撮写真で、ジョグジャカルタにあります。COPスクールの建設費の一部はウータン・森と生活を考える会にも支援を受けていますので、感謝します。ここにはCOPスクールの校舎、野外研修場所、それにキャンピンググラウンドがありますが、まだ空き地になっている場所があるので、もっと施設や設備を整えていきたいと考えています。COPは、今日ご紹介したような様々な活動

をした結果、2011年にはアンドリュース賞というものを受賞し、「アジアで最優秀の若手組織」という評価を受けました。このような受賞を得られたことも、皆さんからの支援のおかげだと思っています。ありがとうございます。



当日の参加者は40名ほどで会場は一杯でした。